

2019年は平成が終わるというだけではなく、新たな時代への転換点として大きな意味を持つ一年になる。今後、佐賀はどのような未来を描いていくのか。昨年末の知事選で当選し二期目を迎える山口祥義・佐賀県知事に話を聞いた。

聞き手・本誌発行人 橋詰空

——山口知事にとって「平成」はどんな時代でしたか？

僕が社会人になったのは平成元年。自治省に入省したときは昭和64年組と呼ばれていました。昭和最後の年の1月に水留浩一くんという友人と一緒にスキーに行ったことを覚えています。水留くんは現在、スシローの社長ですが、昨年、佐賀にやって来てくれた。スシローとJA全農が提携したので、全農前会長の中野吉實さんもいるし、だったら佐賀においでよ！ということでした。平賀でご飯を食べました。平成の最初と最後は水留くんでした（笑）。

平成の最初は右肩上がり、まさにバブリーな時代でした。少しでも豊かさを求めて、少しでも大きな会社に入る。東京中心の時代だったと思います。直後にバブ



ルが崩壊して、みんながどうやって価値観を持つのか、国や地方をどうするのか、その決め方をみんなで模索した時代になりました。今、大きく時代が変わって、新しい社会を予見することは非常に困難というか、先が見えないかもしれない。逆に、モテモテさがの読者である若い人たちにとっては、それぞれの世界で志を持ち、一生懸命やることで、様々なことが実現しやすくなったとも言えます。大きなものに飲み込まれるのではなく、自分としてどういう生き方をすべきなのか。かなりの部分可以实现できる世の中でもあるので、ぜひこの平成の最後をを次の時代への志のステップにしてほしいと思っています。

■卑屈じゃなくなった

——昨年末には佐賀県知事選挙に当選されました。まず一期の総括をお願いします。

佐賀県知事になろうと思ったのは、時代が大きく変革するなかで、佐賀県のこれまで培ってきた文化、伝統、歴史そして、地域のつながり、人の素晴らしさというものが価値になると思ったからです。これから新しい時代が来るからこそ、佐賀が持っているものが光かる。最近は「さがデザイン」ということで林業課の県産材リノベーション事業など、クリエイターやデザイナーなどと一緒に連携しながらやっています。そ

特集 次の時代へ!! 山口知事に聞く

のあたりを、遮二無二ひたすら真っ直ぐに求めてきた4年間でした。モテモテの読者のみなさんも「佐賀さいこうフェス」「佐賀さいこう！応援団」「佐賀さいこう！物産展」という事業を聞いたことがあると思います。いろんな意味で「佐賀は素晴らしい」という機運が大きく育ってきたと思います。

——「佐賀さいこう」というフレーズを作り出したことは、一期目最大の功績だと思えます。これまで、そういうことをトップが口にすることは少なかつた。逆にそれを言わないのが美德という雰囲気がありました。

一番の功績と言われるのと同じく微妙ですが、（おもむろにポケットから「佐賀さいこう」ステッカーを取り出す）。このフレーズはお風呂場で思いつきました。「さいこう」には「最高」や光をあてる「採光」、もう一回みんなで考えようぜの「再考」などいろんな意味があります。これからみんなで盛り上げるためにステッカーを作ってくれ、とお願いしたら、担当者さんがドーンとでかいサイズのものを作ってきたんです。佐賀らしいでしょ？ 腹いっぱいシルルあげる、みたいな。やっぱりひとつひとつの「佐賀さいこう」が愛おしく思えるようなサイズにしよう、とって始めたのを思い出します。

街に出ると、なんとなく「さがさいこう」と本当に思っている人たちが、だいぶん増えてきたな、という実感ががあります。まあまだ道半ばですが。「佐賀には自虐しかない」といつていたような地元の人たちも、だいぶん考え方が変わってきたような気がします。あまり卑屈じゃなくなったというか。これから二期目に向けて、いろんな政策を打ち出す中で、まずは大事な「抗体」ができました。この言葉が正しいかどうか分かりませんが。

——「佐賀はなんもなかよ」とついつい口に出してしまう「佐賀」自虐「ウィルス」への抵抗力をまず身につける。

「抗体」があれば「どうせ無理やろ、なんもなかろうもん」という雰囲気にはならない。そこで、「佐賀さいこう」の雰囲気を作った上で、これからも「サンライズパーク」だとか、いろんな政策を打っていくことで、みんなの中にしっかり県政を培っていきける。その種まきとなる一期目だったと思います。

——今後のあらゆる事業のベースとなる「気持ち」というソフトづくりに取り組んだ。

一期目は無理して、ハード面のように大きなお金を使うべきではないと思っていました。この4年間、県内くまなく周って、いろんな人と話をしながら、自分でやろうとしていることの自信が確信に変わりました。特に「肥前さが幕末維新博覧会」は勝負でした。まったく予定がなかった中、やり遂げました。維新博をやることによって、みんなの中に「佐賀すげえな！」という強い魂が充電されたんじゃないかと思っています。

■維新博で「佐賀すげえな」

——維新博は昨年12月19日に目標の2倍となる来場者200万人を達成しました。

佐賀県政は嘘偽りのない、本当の姿で勝負したかった。150年前の佐賀での事実をちゃんとみんなに知ってもらって、それを未来への起爆剤とする。そのきっかけになるようなタイミングがちょうどよく昨年に行ってきました。その2年前には有田焼400

「佐賀さいこう」で“抗体”づくり／世界基準 佐賀からつくる

年がやってきた。有田焼も世界に目を向けるきっかけのひとつ。それを考えると一期目に有田焼400年が来て、そして明治維新150年を迎えたというタイミングは天の配剤としか思えない。知事選に出るときに意識していた訳ではありません。正直に言えば、そんなものがあるとは本当に知らなかった！

——本当に正直ですね！ 維新博の来場者数のうち、約半数が県外の人だったという統計があります。佐賀を知らない人へ「正しい姿」を伝えることに成功したのでは？

県民のみなさんに「地に足の着いた」佐賀の素晴らしさを知ってもらって「佐賀に生まれて良かった」と誇りを持ってもらうというのが第一の目標でした。もうひとつ、九州の人たちに佐賀の価値がどんなものかということを知ってもらったのも良かった。最近では鹿児島や山口に行くと、案内板に「佐賀に習った」と書いてあります。それまでは見当たらないかった！ 維新博はきつと後々、ボディブローのように生きてくるのではないのでしょうか。

子どもたちもたくさん来場してくれました。子どもたちに世界を目指す「志」を抱いてもらう。「志」がなければ、生きる意欲は湧いてきません。もちろん人生は山あり谷あり、成功もあれば失敗もあります。でも「志」さえ充填されれば困難を乗り越えて、さらに前へ進むという気持ちになれる。佐賀を離れた人たちが常に魂の中に佐賀があり続けるということが大きいと思います。

——東京で「どこから来たの？」と聞かれたら、九州とか福岡ではなく…
佐賀!!! と答えてもらえるようになったの



プロフィール/山口 祥義（やまぐち よしのり）昭和40年7月1日生。
平成元年東京大学法学部卒業、同年旧自治省(現総務省)入省。自治省・総務省では、内閣安全保障・危機管理室参事官補として災害現場の最前線を指揮、総務省過疎対策室長として日本の過疎問題に正面から取り組むなど数々の職務を経験する一方、秋田県地方課、鳥取県観光物産課長・財政課長、同県商工労働部長、長崎県総務部長を歴任するなど地方自治体においても豊富な経験を有す。また、平成25年4月からは、官民交流でJTB総合研究所地域振興ディレクター、ラグビーワールドカップ2019組織委員会事務総長特別補佐を務めるなど民間でも活躍。東京大学教授（大学院総合文化研究科）、地域活性化伝道師（内閣官房）、地域力創造アドバイザー（総務省）として全国の地域支援に尽力。平成27年1月、佐賀県知事に就任。



ではないでしょうか？ でも、佐賀の人はなぐりぐりになってからですよ。展示物の移設はそれぞれ検討しています。葉隠関連は、もっと大きな形でやっていきたいと思えます。みなさんの「志」が木になっている展示などは、来場者のみなさんの心に入っているの、それをどこかに残せれば、維新博のときの気持ちをもう一回取り戻せる。そういう部分が必要だと思っています。

——「抗体」注射に続いて、維新博で「佐賀すげえ！」と言いたくなる「佐賀大好きウィルス」を撒き散らすようになる。そんな土台ができました。次の150年にあたって、どういうことに取り組みますか？

世界基準での価値を佐賀から作り出していきたい、と考えています。佐賀のものづくり、農林水産業が世界を席巻する。佐賀の日本酒が世界で認められたり、トランプ米大統領の晩餐会に佐賀牛が使われたり、宇宙ステーションに運ばれる生鮮食品に佐賀県産みかんが選ばれたり。そういうことが頻りに繰り返されるようにしたい。

スポーツでは「佐賀スポーツピラミッド構想」があります。スポーツは体育ではなく、「Jリーグのサガン鳥栖や桜マラソンのように、プレーするだけのではなく応援やボランティアなど、みんなで支えるというスポーツの楽しみ方があります。ルールを守ってみんなで価値を共有していくという意義と、トップだけでなくボトムアップというか、多くのみなさんにスポーツに親しんでもらうこと。それをセットで取り組む構想を提唱していま

す。きつとこれから世界基準になるでしょう。次の時代には「地方」という言葉はなくなると思います。アジアの時代が必ずやってきて、150年単位で考えれば東アジアを中心としたアジア圏でもっと連携がとられるようになってくる。飛行機がバスのように行き来する時代になります。そうなる軸足は、東京ではなく西の方にシフトしていく。九州の時代がやってきます。その中で地理的優位性を持っているのはどこですか？ 佐賀です。なんで今、九州佐賀国際空港がこんなに多くのお客さんが押し寄せているかというと、佐賀が素晴らしいこともありすが、なりよりも大陸に近いという地理的優位性です。そして福岡都市圏にも近い。それをどう



違いはある。そこで最後に「過って改むるに憚る事なかれ、少しも猶予なく改むれば、誤り忽滅する也」という言葉を添えました。もし方向を誤っていたら修正して、ちゃんとみなさんの前に明らかに直していく。チャレンジはそういう真摯な姿とセットでやらなければいけない。現代的にいえば、失敗したら修正するというリスクマネージメントがあるからこそ大胆なチャレンジができる。

■生活の近くに県庁
——特ダネを教えてください！
みんな思っていたより着目してくれないんですが、アニメの「ゾンビランドサガ」や「銀魂」、「ユリ!!! on ICE」など、全国規模の人気コンテンツと佐賀県がコラボレーションしながらやっている「サガプライズ」事業というのは全国の自治体にとっては驚愕の仕方の仕方なんです。山口県政の特徴とっていいかも知れない。ただ反省しているのは、あんまり「佐賀県」という名前を全

活かしていくのが150年の計だとおもいます。150年と言わずに、50年後の明治維新200年のときには大きく生まれ変わった「佐賀」があると確信しています。私が生きているかは分かりませんが(笑)。特に佐賀の若者は平成の最初に東京中心だったものが、本当にインバウンドなど多くの分野で世界が近くなって、佐賀から世界をターゲットにできる環境ができてつづつある。これからは佐賀の土地において、世界制覇を果たすようにみんなががんばりましょう。

葉隠に込められた 熱いメッセージ

■うまくいかないのが普通
——今年の県庁仕事始め式では葉隠の言葉を職員に投げかけていました。
干支にちなんで猪突猛進に取り組んでもらいたい、と思えば葉隠の中から3つの言葉を選びました。まず「功を積み重ねて」と云うはまだるし、一念発起すれば則ち立ち上がる事也」。自分の人生を振り返ってみて、一番の挑戦は知事選挙に出るといふ決断をしたこと。それまでは、もう少し経験を積んでからかな、とかいろいろな思いの中で判断できなかったことが、佐賀で挑戦するということを含め勝負できました。そして維新博も準備期

面には押し出していないこと。例えばオランダとの交流事業である「ピアノの駅」事業。小城駅や新鳥栖駅にピアノを設置しています。今までなら「触らないでください」というところですがオランダなら自由で弾いてもらう。そういう良い文化を佐賀に持って来りました。佐賀県がやっているんですが、あまりそう言ってこなかった。そうやって人知れず生活の近いところに佐賀県庁があるということを知ってほしいな、と思います。



——最後に佐賀市民へメッセージをお願いします。
モテモテさが読んでらっしゃるみなさんはとっても佐賀が好きで佐賀に愛着を持って、佐賀の街歩きを楽しんでらっしゃると思います。これから、佐賀を人が歩く街に変えていきたいと思っています。車ではなくて人が主役の街に変える。そういうムーブメントを起こしたいと考えています。最近、嬉しかったのが、今度、佐賀市内中心部にお濠を

間も少なく、しかも大きなお金を使うことで、大きなチャレンジと思ったけれども、明治維新150年はもう来ないから一念発起して全力でやるよ、とやり遂げた。県職員のみならずにも、仕事だけではなく、自分の人生や地域活動を含めて勝負しよう、ということをお願いしたかった。
次の「我が身にかかりたる重き事は、一分の分別にて地盤を据え、無二無三に踏み破りて仕て退ねば、埒明ぬもの也」もある意味、私の人生訓みたいなもの。やはり一大事に対してやるかやらないか迷ったらやる方を選ぶ。中学高校のときかなあ。好きな女の子に告白するか迷ったことがあります。大概、しないほうを選ぶことが多いですよ。そして後悔する！ あの時、言っておいたらどうなったんだろう、と悶々としてしまう。でも、好きと言って「あんたやなかよ」と言われたら次に行ける。違う人生に踏み出せませんか？
——うーん、あんまりそういう経験はないですね。
まあ、いろんな経験を積む方に軸足を置いていくと、何かすごく前向きになれる。もちろん、成功も失敗もある。どんな優秀な野球選手でもせいぜい打率3割。7割はうまくいきません。基本的にうまくいかないことが普通だと思って、前向きに生きていく。そうすれば人生は楽しくなってくるし、見えてくる。この言葉を選んだのはそういう意味です。
ただそういう風に無二無三と、行政は得てして「引き返せない」と勘違いする。行政は一回やってしまうと、全部それを正当化しようというクセがある。それって僕らが必要ないと思っています。行政だって人だって問

佐賀市を人が主役の街に変えよう!!



復活させるんですが、当初「駐車場がほしい」という意見に変わったこと。駐車場って車が停まっているだけで結局、何も産み出さないが、お濠は多くの人々がやってきて何か生まれていく。これは本当に住民の意識の変化で、佐賀が変わりつつあるなと感じました。行政はいろんなところで仕掛けを作っていく。それを活かすようなチャレンジをみなさんで考えてください!!